木下房男*: 長野県大鹿村地蔵峠の中央構造線の新露頭

Fusao KINOSHITA: A new exposure of the Median Tectonic Line at the Jizō pass, Ōshika village, Nagano Prefecture

長野県伊那谷中央部を南下する国道 256 号線は、ちょうど中央構造線上を走っている。すなわち、諏訪湖南端から高遠町、長谷村、大鹿村を経て南信濃村を通過する。最近、未開通区間の 1 つである地蔵峠付近の工事が進められ、中央構造線の新露頭が露出したのでここに報告する。

第 1 図 高遠—地蔵峠間の中央構造線 (M. T. L.)
A~G はこれまでに報告されている露頭の位置。H が新露頭。

従来、中央構造線が地蔵峠付近を通過することは予想されていたが、その露頭は全く見られなかった。大鹿村付近の中央構造線の露頭の位置を第 1 図に示す (松島, 1973)。A, B, D, E, G は露頭として直接見ることのできるものであり、いずれの地点においても内帯の“鹿塩ミローナイト”と呼ばれる圧砕岩と外帯の三波川結晶片岩類とが断層で接している。C, F は地形 (ケルンコル・ケルンバット) から判断できるものである。

今回新たに露出した地蔵峠の新露頭は H である。第 2 図に地蔵峠付近の中央構造線を、第 3 図に新露頭の写真を、第 4 図に新露頭のスケッチを示す。

本露頭は東西方向の道路に沿った北に面する幅 70 m、高さ 15 m の切通しである。中央構造線は 1 本の明瞭な

第 2 図 地蔵峠 (H) 付近の中央構造線 (M. T. L.)

1981 年 11 月 9 日受理

* 名古屋大学理学部地球科学教室 (内地留学中)。長野県飯田市三穂小学校。

第3図 地蔵峠における中央構造線の新露頭(1981年8月9日撮影) 北西方向から斜め撮影。断層西側の圧砕岩はこれには含まれていない(第4図参照)。G: 緑色片岩, GB: 緑色片岩と黒色片岩の混在部, M(B): 圧砕岩が大部分をしめる混在部, f: 断層, B(M): 黒色片岩が大部分をしめる混在部。

断層(f)と、その両側の破碎帯からなっている。断層面の走向はN10°E, 傾斜は垂直である。破碎帯部は圧砕岩と黒色片岩とが混在する。断層(f)の西側では黒色片岩が大部分をしめ、断層(f)の東側では圧砕岩が大部分をしめている。さらに東側では、黒色片岩は緑色片岩に移化する。断層(f)の周辺では、黒色片岩も圧砕岩もとくに水分を多く含んでおり、風化作用を強く受けたところでは、圧砕岩は黄褐色を呈する。

鏡下では、黒色片岩、圧砕岩ともに曹長石・石英・方解石・絹雲母・燐灰石・黒色不透明鉱物(石墨?)などが観察される。黒色片岩中の曹長石は0.03~0.4mm大で集片双晶を示し、ときに果帯構造を示すことがある。圧砕岩中の曹長石は0.01~0.2mm大で集片双晶は認められるが、果帯構造は認められない。曹長石が絹雲母に変質していることがある。黒色片岩中の石英は波動消光を呈し、0.05mm大の微晶の集合体として産するほか、曹長石・方解石・絹雲母などと集合体をなして産する。圧砕岩中の石英は顕著な波動消光を呈し、縫合状に入り組んだ細粒の集合体(2mm)として産することが多い。石英

単結晶は最大0.2mmである。方解石は黒色片岩中では細脈として産することがほとんどであり、まれに単独粒

第4図 地蔵峠における中央構造線新露頭のスケッチ 北(正面)から見た図。

(0.02~0.4 mm) のこともある。一方、圧砕岩中の方解石は細脈または単結晶(0.01~0.2 mm)の集合体として産する。絹雲母は全体的に散在し、極めて細粒で最大 0.03 mm である。黒色片岩、圧砕岩中に微粒~細粒(最大 0.07 mm)の燐灰石がわずかに認められる。黒色不透明鉱物(石墨?)は、圧砕岩では極めて少量である。

なお、本露頭は 1981 年 8 月には第 3 図に示すようによく観察できた。しかし 1981 年 12 月には露頭の下部・中部はコンクリートで被われ、上部は法枠がつけられ、

人工緑化されたので、本露頭を観察できなくなった。しかし、本露頭の 20 m 南延長部では、小規模ながら中央構造線の露頭が見られる。

最後にこの小論をまとめるにあたり、名古屋大学の石岡孝吉先生、諏訪兼位先生、鈴木和博先生、野呂春文氏から適切な助言をいただいた。記して感謝する。

文 献

松島信幸, 1973 : 赤石山地の中央構造線. 杉山隆二編著. 中央構造線. 東海大学出版会, 9-24.